2013年エビ類

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

年	数量 輸入 活	輸入 ｲｾｴﾋﾞ	輸入 冷ｴﾋﾞ	東京 生車	東京 冷輸入	家計消費 生（ｸﾞﾗﾑ）	在庫	価格 輸入 活	輸入 ｲｾｴﾋﾞ	輸入 冷ｴﾋﾞ	東京 生車	東京 冷輸入	消費支出 生（円）
24	0.1	4.4	198.8	0.4	11.9	1,935	65.7	4,411	2,162	855	4,728	1,151	3,212
25	1.5	3.0	187.7	0.4	10.6	1,702	63.7	2,572	2,338	1,130	5,396	1,429	3,054
%	1919	67	94	94	88	88	97	58	108	132	114	124	95

輸入国（冷エビ類）　単位：1000トン

年	中国	ﾐｬﾝﾏｰ	ﾍﾞﾄﾅﾑ	ﾀｲ	ﾌｨﾘﾋﾟﾝ	ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ	ｲﾝﾄﾞ	ｸﾞﾘｰﾝﾗﾝﾄﾞ	ｵｰｽﾄﾗﾘｱ	ｶﾅﾀﾞ	ｴｸｱﾄﾞﾙ	ﾛｼｱ	ｱﾙｾﾞﾝﾁﾝ	調整品
24	15.3	6.2	33.8	35.3	2.9	31.4	27.7	3.7	1.4	5.9	1.7	6.7	13.9	50.3
25	14.5	6.2	34.3	20.4	2.4	32.3	31.5	3.7	1.6	4.7	1.7	6.1	14.6	45.7
%	95	99	102	58	82	103	114	103	111	80	98	91	105	91

輸 入 の 動 向

25年の冷凍エビの輸入量は、18.8万トンで前年（19.9万トン）をやや下回った程度で、ＥＭＳ(Eary Mortarity Syndrome)騒動の中では比較的極端な搬入減少に繋がらなかった。

世界のエビ生産の70%前後を占めて、ブラックタイガー（ＢＴ）や天然ホワイトを需要面においても凌駕するようになったバナメイは、アジア地区を中心として、生産規模の拡大もあって、その優位性が更に顕著になっていた。しかし前年来、餌に使われているエトキシキン問題やＥＭＳの発生が表面化し、ＥＭＳは世界的に拡大したことで、特にバナメイの生産ウェイトが高い主要国では大きく生産量を落としている。病気に強く、生産速度が速いといった従来にない特質をもったバナメイは、ＥＭＳの発生によりこうした特徴を見直さなければならない事態にまで追い込まれている。

有効な対策が、発生から１年以上経っても発見できなかったこともあり、タイのようにエビ生産の大半がバナメイである国では輸出量が激減している。とはいうものの、末端小売りでのバナメイ主流の扱いには変化がなく、依然バナメイが主流になっている現状に変わりはない。

冷凍エビ輸入価格は、1,130円で前年（855円）を大きく上回って11年振りに1,000円台に戻した。ＢＴ，バナメイの価格高騰が原因である。

25年の為替相場（対ドル）は、年初から円安が進み89円の円安から始まり、２月93円、３月95円、４月98円、５月101円と円安が進んだが、一時的に６月、８月に97円、98円と円高に振れたが、その後７月100円、９月99円、10月98円、11月100円、12月103円となり安部新政権と日銀の金融緩和政策の中で円安が進んだ。

主要輸入国は、昨年初めてトップに立ったタイがＥＭＳの発生により大幅に生産が減少したことでトップの座から落ち2万トン（前年：3.2万トン）となった。トップはベトナムが返り咲き3.4万トン（前年：3.4万トン）で、続いて、インドネシア3.2万トン（前年：3.1万トン）、インドが3.2万トン（前年：2.8万トン）であった。また中国は1.5万トン（前年： 1.5万トン）であった。

また、赤エビは刺身需要も安定・定着しているが、昨年にも増して現地での好漁もあってアルゼンチン産が席巻し1.5万トン（前年：1.4万トン）と引続き数量を伸ばし、ロシアは6.1千トンで前年（6.7千トン）を下回り、カナダとグリーンランドがそれぞれ4.7千トン（前年：5.9千トン）、3.7千トン（前年：3.7千トン）とカナダ減少、グリーンランドが増減なしとなった。

また、近年製品需要の伸びも若干停滞気味になっていた調整品の輸入量は、4.6万トンで前年の5万トンを下回った。スシエビや尾付きエビ、ボイル、フライ等の衣付き関係はタイ2.4万トン（前

コメントの追加 [i1]: EMSの発生が表明化し、そしてEMSは世界的に・・・
もしくは、またEMSは世界的に・・・
接続詞必要？

コメントの追加 [i2]: 前年のデータベトナムの前年が3.4万というと、タイが3.2万だと矛盾してます。
またトップという言葉の繰り返しが多い？？？

年：2.7万トン）や、ベトナム1.2万トン（前年：1.2万トン）、インドネシア0.6万トン（前年：0.6万トン）、中国0.5万トン（前年：0.6万トン）で本年はタイのバナメイ減産が調整品にも反映し減少が顕著であった。

在　庫　量

本年の在庫量は、6.4万トンと前年（6.6万トン）をやや下回った。

本年は輸入量が引続き前年をやや下回った。国内販売価格は、前年来の浜値の高値が、ＥＭＳの発生とそれへの対策遅れもあって生産の回復も予想以上に遅れたことで一層進行した。また調整品の国内搬入も減少したこともあり、在庫はやや減少した。

本年の冷凍エビ在庫は、越年の6.7万トンのほぼ前年並みの高水準から出発したが上半期は搬入の少なさもあり、総じて少な目気味であった。しかし下半期になってからは末端価格の上昇もあって荷動きは低調になり、徐々に在庫は膨らんだ結果、越年在庫は、6.8万トンとなった。近年在庫水準の低さが恒常的になっていたが、本年は5万トン台が上半期に２月あったのみで、その後は各月とも6万トン台の在庫を記録した。

消費地入荷量と価格

25年の東京消費地における冷凍エビ類の入荷量は、1.1万トンで前年（1.2万トン）を下回り、依然入荷の減少傾向が続いている。

本年の東京消費地価格は1,429円で前年（1,151円）をかなり上回った。これは入荷の大半を占める輸入冷凍エビの価格の高騰が齎したものである。

本年のエビを巡る特徴は、①本年は前年末の急激な円安の中新年を迎えたが、より一層の円安が進行し、周年を通じて為替円安（平均１ドル＝98円）傾向が昨年以上に顕著で、搬入コストも嵩んだ、②アジアの産地価格は養殖ＢＴのインドネシア物（１６－２０サイズ）が25.8ドル/kg台に達するなど過去最高値を記録した、③抗酸化剤エトキシキン問題がそれなりの終息をみたが、ＥＭＳの発生・拡大によってバナメイの生産の世界的な減産傾向がみられ、タイからベトナム、インド、インドネシアへのシフトがみられたこと、④米国の好景気＝消費の底堅さ、中国の旺盛な消費重要の一方、為替円安の進行もあり日本側のエビ価格決定権の喪失等、世界的な供給減少の中で日本のポジションが問われた１年であった、⑤ＢＴ、バナメイとも市況の高騰の中で、国内販売価格の上昇もあり、家計消費も数量が前年を10%以上の割り込みがみられ、金額でも前年割れが顕著であった、⑥今年も搬入が増加したアルゼンチン赤エビの販売が、エビの目玉商品として目立って多くなった、⑦国内エビマーケットは、量販店を中心に安全・安心の動きが強まり、近年ＰＢ商品への指向が強まっている、ことなどである。